

# 2020 読書メモ 2・3 月号

—歴史的大変革「コロナ・ショック」の時代をどう読解するか—

## 佐藤優 『十五の春』 (上・下) (幻冬舎・2018年)

やなぎさわかつひろ

柳 沢 克 央 (信州・上田仮説サークル)

2020年3月20日(土), 3月例会用レポート

○はじめに…武漢発の新疾病が世界中を席卷しています。突如として激動の時代に突入しました。まあ、よく考えるといくつもの「予兆」があったわけですが…。民主主義の危機です。そしてさまざまなフェイク・ニュースに溢れています。どう読解したら良いか。今までの読書経験の真価が問われます。深読みしすぎてもダメ、全く読まなくてもダメ。学び方は人それぞれです。楽しみながら、激動の時代を生き抜いていきましょう。

○今月までに読んだ本 (順不同)

◆野村克也著『野村のイチロー論』(幻冬舎・2018年)

要するに「イチローは野村と違って走・攻・守すべてが超一流の天才バッターである。だが、チームに貢献する姿勢にかけるので人望がない」ということ。当たっていると思う。才能とチームプレーについて野球というゲームを通じて深く考える材料を提供してくれる。読みやすい。野球好きの高校生にも勧めたい。

◆『親が知っておきたい学びの本質の教科書・教科別編』(朝日新聞出版・2019年)

結論は「読み・書き・計算」は論理的思考力のベースになるから大切だ。という、一見平凡のようだが、至極当然かつ真っ当なもの。

竹内三郎さんご推奨の SF 作品—ガモフ著『不思議宇宙のトムキンス』(白揚

社) が推薦図書として紹介されていた。一度読めば十分という軽めの内容。

### ◆佐藤優著『十五の春』(上下)(幻冬舎・2018年)

Amazonより……ソ連・東欧一人旅。人生を変えた40日間。

高1の夏休み、日本を飛び出し出会った外の世界。

異能の元外交官にして、作家・神学者である“知の巨人”の原点。

若いうちに外の世界を見ておくと、後でそれは必ず生きる。そのことをきっかけにして、自分がほんとうに好きなことが見つかるかもしれない。ほんとうに好きなことをして、食べていけない人を僕は一人も見ただことはない。ただし、中途半端に好きなことではなく、ほんとうに好きなことでないとダメだ。十五の夏のソ連・東欧一人旅は、神様が準備してくださった道だった。

→モスクワ→サマルカンド→ブハラ→タシケント→ハバロフスク→ナホトカ→バイカル号→横浜

(気になった部分を抜き書きした) ……ホテルに戻ると、ロビーの横のカフェに行った。小さなカップに入ったコーヒーを飲みながら、両親と妹に宛てて手紙を書いた。その後、今日、一日の出来事をもう一度考えてみた。ワロージャは親切だったが、自分の家族や大学で何を勉強したかについては何も話さなかった。それに、教会や聖書の話になると、できるだけ早く切り上げようとした。インツーリストの職員は、確かに親切だ。しかし、一緒に写真を撮っても自宅の住所は教えてくれない。ドニプロ・ホテルのインツーリスト気付と書けば届くという。外国人に自宅の住所を教えることが禁止されているのかもしれない。そういえば、国際文通案内の本で、ソ連の学校の住所がいくつか書いてあったので、そこに「ペンフレンドを紹介してほしい」という手紙を3～4回送ったが、返事は一度も来なかった。その本に書いてあるハンガリーのペンフレンド協会に手紙を送ったら、2カ月後にはフィフィから手紙が来た。外国人との接触の制限については、じつはソ連はとても厳しいのではないだろうかという気がしてきた。僕の旅行も、誰かがいつも監視している状況の中で行われている。そう考えると、気味が悪くなってきた。

悪いことを考えると、昔の記憶から嫌なことが次々と思いつかんでくる。まず、幼稚園の2年目のとき、先生が体操の時間に「それでは悪い見本を見てみましょう」と言って、みんなの前で僕にスキップをやらせたときの情景が浮かんできた。あれから、毎朝、幼稚園に行く時間になると38度を超える高熱が出るようになった。この熱が昼前になると引いてしまうのである。僕は登園拒否

になって、2カ月、幼稚園を休んだ。僕の話聞いて、母はスキップが上手にできない僕の運動機能に何か問題があるのではないかと考え、大宮中央病院の小児科に連れていかれた。小児科の先生は、僕に何度も階段を上り下りさせた。その結果、「優君の運動能力にはまったく問題がありません。幼稚園なんか行かなくても人生に支障はありません。今の幼稚園に通うのが優君の負担になっているのですから、幼稚園を変えるか、それとも幼稚園に通わずに、自宅にいればいい。問題の原因は、優君ではなく担任の先生にあります」という診断を先生は母に伝えていた。母が幼稚園に退園したいという話をすると、園長と担任の先生が僕の家に来た。母は、医師から聞いた話を二人に伝えた。担任の先生は「悪気はなかった」と言って、泣き出した。担任の先生が泣いているのを見て、僕は自分が何かとても悪いことをしているような気がした。そして、「ママ、僕は明日から幼稚園に行く」と言った。翌日、幼稚園に行くと、担任の先生は僕に対する態度は以前と変わって、とてもいい感じになった。もっとも、体操の時間に「悪い見本」を見せるという、この先生のやり方は変わらなかった。ただし、犠牲者が僕以外の演示になっただけだ。幼稚園は楽しくなかったけれども、僕は無理をして通い続けた。もう高熱が出ることはなかった。

\*

驚くべき記憶力。そして、面白さは無類。異文化体験記の傑作。そして、今は存在しない幻の社会主義国での経験記録はとても貴重で、この点でも無類。

◆ユヴァル・ノア・ハラリ著『21Lessons (21世紀の人類のための21の思考)』(河出書房新社・2019年11月) 来月報告予定。

◆ユヴァル・ノア・ハラリ著『ホモ・デウス』(上・下)(河出書房新社・2018年) 来月報告予定。

◆立川談慶著『教養としての落語』(サンマーク出版・2020年)

手軽で読みやすい落語の入門書。談慶さん、忙しいんだろうな。でも、よくこういう本が書けたよな～。六代目三遊亭圓生師匠への評価が少し低いのはなぜだろうか。

## ○企画メモ

激動の時代を迎えて、XXXXさん(XXXX研究所所長)の講演を聴きたい。屋代高校内での実現を目指しますが、広く地域の教師・保護者にも聴いていただきたい新時代の息吹きを共有する機会を早く設けたいと思い、本メモを作成しま

した。

○なぜ，XXXX さんなのか

- ・大学受験指南のパイオニア。第一人者。
- ・日本の大学約 800 をぜんぶ訪問。海外主要大学も訪問済み。唯一無二の人。
- ・県内有力高校において多数の講演実績あり。
- ・多くの高校に未だ残存している 20 世紀的キャリア教育観の部分的消去とアップデートが必要。

○現状分析

- ・文科省が明確な大学運営方針を示せていない。→確かな情報と分析とが必要。
- ・日本の産業構造，世界におけるプレゼンス（存在感）が変化している。  
→高校生のうちから視野を広げて展望を持っておく必要性が増してきている。
- ・遠からず，国公立大学の地位に大変動が起こる。  
→生き残りのための戦略が不可欠。受験生だけでなく，高校も高校教師も。
- ・生徒自身が自己の進路について主体的に考えて選ぶことが大切，不可欠。

○生徒を対象にした講演は教師の頭越しになってしまっけしからんという場合→教師の研修会を設定すれば，さらにシャープな話が聴けて有意義。

○聴き手の問題意識に十分に答えてくれる力量を備えている。

○どのようにしたら，この運動を実現できるだろうか。生徒たちの未来を充実させるために，どのような方法をとったらよいだろうか。（メモ以上）

○まとめ

生徒たちの声が聞こえない学校は寂しい。早くいつも通りの学校に戻りたいものである。そのために，いま自分がすべきことを探して一つ一つこなしている。きょうは，このメモの他に 4 月最初のテスト問題を作成した。自分にコントロールできることに集中して，少しずつでもまとまった形に残るものを作りたいと思う。次は牧さんのテープを聴き直すことから始めようと思う。〔2020 年 3 月 19 日（木）16:30〕